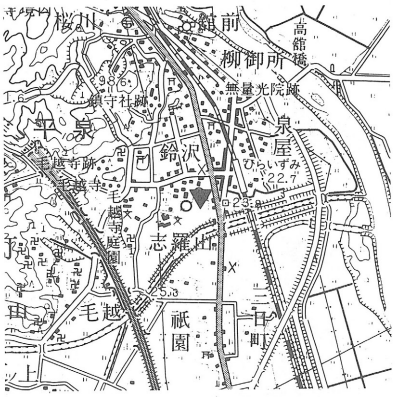
岩手・志羅山（しらやま）遺跡

1　所在地　岩手県西磐井郡平泉町平泉字志羅山
2　調査期間　第二一次調査　一九九二年（平4）一一月
3　発掘機関　平泉町教育委員会
4　調査担当者　菅原計二
5　遺跡の種類　集落跡
6　遺跡の年代　一二世紀
7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

志羅山遺跡は平泉町の中心市街地の南側に位置し、ＪＲ東北本線平泉駅の西側三〇〇ｍの付近を中心として、東西五〇〇ｍ・南北五〇〇ｍの広がりをもつ遺跡である。平泉は一一世紀末から一二世紀後半にかけての約九〇年間、奥州藤原氏が四代にわたり本拠地とした地域である。当遺跡の周辺には西に特別史跡毛越寺跡・観自在王院跡と倉町遺跡、東に泉屋遺跡、北に花



（一　関）

立Ⅱ遺跡、鈴沢の池跡などの遺跡が密集している。

第二一次調査区は志羅山遺跡の南東寄りに位置し、北西の緩斜面から南東の太田川に向かって下る沢状の自然地形を、一二世紀において整地して平坦な生活面を造り出し、建物や井戸、塀、溝などの施設を築いている。建物は四間×五間程度の掘立柱建物が二棟以上、ほぼ同一地点で建て替えられている。井戸は二基を検出している。いずれも建物の北側に位置し、双方ともに井戸側の木枠が残存していた。西側の一号井戸は直径三・五m深さ五・一mの規模をもち、人為的に埋め戻されている。井戸底からは完形の中国産白磁水注が曲物の柄杓とともに出土した。二号井戸は直径四・八m深さ四・八mの規模をもち、今回報告する木簡(1)の他、かわらけ約八九kg、常滑産大甕、その他の国産陶器、中国産白磁椀・青磁椀の破片、鳥形や下駄などの木製品、瓦、縄などが出土した。二号井戸は出土遺物から一二世紀後半に廃棄されたと考えられる。

8　木簡の釈文・内容

(1)　「〈今□〔犬カ〕殿」　88×19×3　032

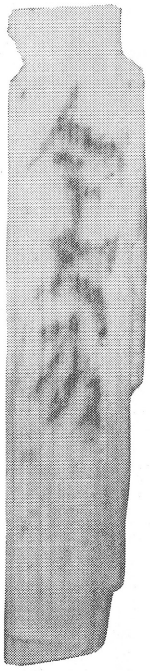
上端の左右に切り込みのある付札である。右側の切込みより上部と右辺の下半分を欠く。裏面に墨書はない。

なお木簡の釈読については、奈良国立文化財研究所の館野和己氏のご教示を得た。

9　関係文献

平泉町教育委員会『平泉遺跡群発掘調査報告書』三四（一九九四年）

（菅原計二）



実寸

(1)